

次期県立高等学校活性化計画の策定に 向けた基本的な考え方

三重県教育委員会事務局

目 次

■ 三重県立高等学校の活性化の現状	P2
■ 次期県立高等学校活性化計画の策定に向けた 基本的な考え方	P8
■ 国の高校教育改革に関する基本方針 (グランドデザイン)	P10
■ 関係資料集	P13

三重県立高等学校の活性化の現状

現行の県立高等学校活性化計画の概要 ①

1 計画趣旨

これからの子どもたちにとって魅力ある県立高等学校のあり方やさらなる活性化について検討し、実現していくためのもの

2 計画期間

令和4年度から令和8年度までの5年間

3 計画内容 (1) 活性化の取組

① 自律した学習者を育てる学びの推進

基礎・基本を重視し自己肯定感を高める教育の推進／キャリア教育の推進／探究活動の推進／高等教育機関等と連携した教育の推進／地域に根ざした教育の推進／ICTの活用による学びの推進

③ 誰一人取り残さない教育の推進

特別な支援を必要とする生徒への支援／不登校の状況にある生徒等への支援／日本語指導が必要な生徒への支援／経済的困難な状況にある生徒への支援／学びに向かう力を育む教育の推進／交通が不便な地域における生徒の学習機会の提供

⑤ 子どもたちに必要な学びの実現に向けた教職員の資質向上と学校経営改善

教職員の育成／授業力の向上／組織運営体制の強化による教育活動の活性化

② これからの社会の担い手となる力の育成

よりよく生きようとする態度の育成／社会の一員としての自覚と責任感の育成／グローバル教育の推進

④ 人口減少に対応した学びの推進

協働の学びの機会の確保／学習活動の機会の確保

⑥ これからの時代に必要な力を育む県立高等学校の各学科・課程の活性化

普通科・普通科系専門学科／職業系専門学科／総合学科／定時制課程・通信制課程

現行の県立高等学校活性化計画の概要 ②

3 計画内容 (2) これからの時代に求められる学びを提供できる県立高等学校のあり方

地域の 活性化 協議会

検討・協議事項

- 地域の高等学校の学びと配置のあり方について検討
- 1 学年 3 学級以下の高等学校は統合についても協議

検討・協議における留意点

- 統合ありきではなく、地域の実情に応じ丁寧に進める
- 状況に応じて、これまで取り組んできた、地域と連携した学びや学校独自の学びについての継承、交通が不便な地域における学びの機会の提供方策、分校化や校舎制への移行などについて協議

統合の 例 外

- 1 学年 3 学級以下の高等学校のうち、他の高等学校では担うことが難しい県内唯一の学科や学びの形態を有する高等学校は、引き続き活性化に取り組む

募集 停止

- 入学者が 2 年連続して 20 人に満たず、その後も増える見込みのない場合は、募集停止

地域の活性化協議会(地域活性化推進協議会)

委員

- 学識経験者
- 高等学校PTA関係者
- 県立学校長代表
- 地域有識者
- 関係市町教育委員会教育長
- 教職員代表
- 小中学校PTA関係者
- 小中学校長代表
- など

設置地域

- 北勢地域（桑名地域及び四日市地域）※
- 松阪地域
- 伊勢志摩地域
- 伊賀地域
- 鈴鹿亀山地域
- 紀南地域
- 津地域

※ 紀北地域については、県立高校が1校のみとなったため、学校が主体となり協議会を運営

協議事項

- 今後の当該地域全体における県立高等学校の在り方に関する事
- 当該地域の県立高等学校活性化の方策に関する事
- など

留意事項

県立高等学校活性化計画に基づき、以下の点に留意する。

- 1 学年3 学級以下の高等学校は統合についても協議
- 協議に当たっては、統合という結論ありきではなく、地域の実情に応じ丁寧に進めることとし、その際、状況に応じて、これまで取り組んできた、地域と連携した学びや学校独自の学びについての継承、交通が不便な地域における学びの機会の提供方策、分校化や校舎制への移行などについて協議

次期県立高等学校活性化計画の策定に係る諮問と答申

三重県教育委員会

令和7年3月26日
三重県教育委員会から三重県教育改革推進会議へ諮問

次期県立高等学校活性化計画の策定に係る県立高等学校
の学び並びに配置及び規模の在り方について

令和8年3月6日
三重県教育改革推進会議から三重県教育委員会へ答申

三重県教育改革推進会議

県立高等学校の在り方調査研究部会

県立高等学校の学び並びに配置及び規模の在り方について 答申(概要)

1 背景

三重の教育

- 三重県教育施策大綱
- 三重県教育ビジョン
- 県立高等学校活性化計画

三重の現状

- 中学校卒業者数の減少
- 専門学科の生徒の割合が全国比で大きい
- 人口が県内全域に分散
- 通信制課程の生徒の増加
- 卒業後就職する生徒の割合が全国比で大きい
- 学校施設の老朽化が著しい

2 基本的な考え方

生徒ファースト

生徒にとって豊かな学びを提供することを第一の目的とする

- 生徒が希望する学びを選択できる環境を整える
- 〔 ※生徒の多様な学びのニーズに応える選択肢を生徒が通学できる圏域内に配置
※それぞれの学校において多様な学びの選択肢を提供 〕
- 価値観の異なる多くの級友と出会える環境にする

3 学びの在り方

(1) 課程

- 異なる課程の学校間連携
- 複数の課程を一つの高校に設置し、課程間を柔軟に行き来する制度の導入

(2) 学科

- 普通科のコースの充実
- 普通科と専門学科との併設
- 総合学科への改編

(3) 学校施設

- 共用空間等による学びを支える教育環境の整備
- ※県立高等学校の再編の議論と一体となって進めることが必要

(4) 地域・企業との連携

- 地域・企業と連携し、社会全体で取組を推進

(5) 県立高等学校の強みを生かした取組

- ICTを活用した遠隔授業の実施
- 他校で修得した単位の認定等の学校間連携
- 県立高等学校の全ての生徒を対象とした体験型学習等の実施

4 配置及び規模の在り方

通学条件

通学時間は、できれば60分以内、少なくとも90分以内

地域における配置

それぞれの地域で多様な学びの選択肢を提供
※難しい場合には複数の地域を一つのまとまりとして配置

規模の考え方

- 多様な学びの選択肢の提供
 - 多くの級友と出会える環境の提供
 - 学校行事や部活動の充実
- 一定の規模があることが望ましい

適正規模

1 学年4 学級～8 学級
※大学進学ニーズに応える学校は1 学年6 学級以上
※1 学年4 学級以上の配置が難しい地域は、1 学年2 学級・3 学級

5 子どもたちに選ばれる県立高等学校

- スクール・ミッション、スクール・ポリシーの分かりやすい発信
- コミュニティ・スクールの仕組みなどを通じた保護者や地域住民の意見の反映

次期県立高等学校活性化計画の 策定に向けた基本的な考え方

次期県立高等学校活性化計画の策定に向けた基本的な考え方

答申

- 生徒の多様な学びのニーズに応じた選択肢を通学できる圏域内に配置
- 価値観の異なる多くの級友と出会える環境にする



国の高校教育改革に関する基本方針 (グランドデザイン)

- AIに代替されない能力、個性の伸長
- 地域経済、社会の発展を支える人材の育成
- 都道府県で高校教育改革実行計画を策定



次期県立高等学校活性化計画

- 県立高校の活性化に当たり基本となる理念や考え方
- これからの時代に求められる学び
- 学科、課程の目指す姿
- 学校の配置、規模の基準
- 計画の実現に向けた取組方針



高校教育
改革実行
計画

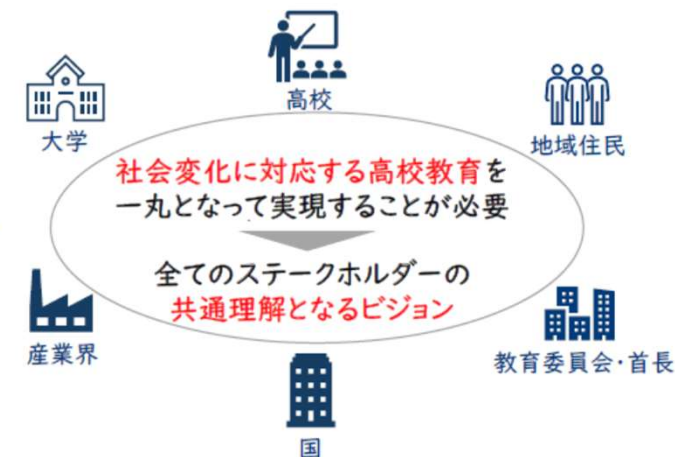
※ 今後、子どもへの意見聴取とパブリックコメントを実施予定。

国の高校教育改革に関する基本方針 (グランドデザイン)

国の高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）の概要 ①

1. グランドデザインの背景・必要性

- ✓ AIの実装などデジタル技術の目まぐるしい発展
2040年には、**少子高齢化、生産年齢人口の減少、地方の過疎化**が一層深刻化
→現在の人材供給トレンドが続けば、**労働力需給ギャップ**が発生
(事務職は余剰、**AI・ロボット関係、いわゆる理系人材は不足**)
- ✓ 将来を正確に予測することは難しく、どのような未来が訪れるか分からない
→生徒それぞれの**多様な個性やニーズ、興味・関心に応じた学びを生かした自己実現**を支え、**生徒の可能性を広げ能力を伸ばす**
→全ての高校生が**家庭の経済状況等に左右されることなく**、希望する大学等への進学や就職等をし、それが**個人の幸福**につながり、ひいては、**我が国の経済・社会の基盤を強いもの**としていくことにつながる



2. 高校改革の方向性～2040年に向けた高校の姿～

視点1 不確実な時代を自立して生きていく
主権者として、AIに代替されない能力や個性の伸長

- 学びの在り方の転換 (New Transformation)**
- ✓ リアルとデジタルの良さを組み合わせつつ、**「好き」を育み、「得意」を伸ばす機会を確保**し、生徒の実態を踏まえた柔軟な教育課程の実現
 - ✓ スクール・ミッション、**スクール・ポリシー**を踏まえた**教育活動の改善、公表**
 - ✓ **高校教育と一貫した大学教育改革**(主体的・自律的な学修のための環境構築、出口における質保証等)

視点2 我が国や地域の経済・社会の発展を支える人材育成

- 最先端を学ぶ高校の特色化・魅力化 (New Excellence)**
- ✓ **探究・文理横断・実践的な学び、STEAM教育**、産業界と協働した専門高校の学びの充実
→ **理数・文系的素養やAIを使いこなす力**を身に付け、社会で活躍するロールモデルを体感
 - ✓ 各高校の**特色化・魅力化**
→ 学科構成の見直し、**専門高校の機能強化・高度化**、グローバル人材の育成
→ **「普通科」の在り方の転換、即戦力の人材と進学を見据えた高度専門職人材の育成**

視点3 一人一人の多様な学習ニーズに対応した教育機会・アクセスの確保

- 学ぶ機会・アクセスの確保 (New Education)**
- ✓ **全国どこにいても多様で質の高い学びを保障**し、地方の生徒はもとより誰一人取り残されず、全ての生徒の可能性を最大限引き出す
(**地理的アクセスの確保**、都道府県の実情等に応じた**学校配置・規模の適正化**、小規模校を含む**遠隔授業**等の推進)
 - ✓ 通信制高校の**教育の質の確保・向上**
 - ✓ **不登校生徒への学習支援、特別支援教育や日本語指導**が必要な生徒への教育の充実

3つの視点を重視しながら、更なる高校改革を進め、N-E.X.T.ハイスクール構想を実現する。
高校から大学・大学院に至るまでの一貫した改革により、強い経済や地域社会の基盤となる人材を育成する。

※ 文部科学省「高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けた「N-E.X.T（ネクスト）ハイスクール構想」～（令和8年2月13日公表）（概要）」より抜粋

国の高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）の概要 ②

3. N-E.X.T.ハイスクール構想の中核となる高校支援



※交付金等の構築に先立ち、高校教育改革のための基金を都道府県に造成し、N-E.X.T.ハイスクール構想の実現のために、パイロットケースとして先導的な学びの在り方を構築する高校（改革先導拠点）を創設。

新しい学校のイメージや取組例

専門高校の機能強化・高度化 （アドバンスド・エッセンシャルワーカーの育成等）

（学校のイメージ）

地域発のイノベーションを興すことのできる人材等の育成を目指し、理論と実践の往還によるカリキュラムの実施等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

（取組例）

- ✓ ビジネス経験の必修化
- ✓ ものづくりから流通まで一体的な学びの実践
- ✓ 「高校版企業寄附講座」等の実践やそれを前提とした進学・就職機会の確保

普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化 （文理の双方の素養を有する人材の育成等）

（学校のイメージ）

文理にとらわれない幅広い教養等を備えた新しい価値を創造する人材等の育成を目指し、実社会につながる生きた授業の実践等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

（取組例）

- ✓ 実社会につながる生きた授業の実践
- ✓ 高度実験環境を核とする理数探究拠点整備
- ✓ 探究型授業研修の充実による教師のスキル向上、探究伴走支援専門チームの構築

地理的アクセス・多様な学びの確保

（学校のイメージ）

学校の枠を超えて多様な人々と協働し、社会の課題を主体的に探究・解決できる人材等の育成を目指し、柔軟で質の高い学びの実践等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

（取組例）

- ✓ 学校間連携や遠隔授業等を活用した教育機会の確保
- ✓ 学校と地域の関係機関の連携・協働の強化による学習環境の提供
- ✓ 他の学校種との連携の充実

これらの取組の一環として、留学支援を含むグローバル人材育成支援や、学校と地域が連携・協働した学力向上・学習支援などについて取り組む。

2040年までに達成を目指す目標

【職業教育の高度化・魅力の強化関係】

- ・地域の産業界等と連携・協働した取組を行う専門高校：100%
- ・少子化傾向においても専門高校の生徒数を現在と同水準

【普通科の在り方の転換・魅力の強化関係】

- ・文理横断的な学びに取り組む普通科高校：100%
- ・普通科でいわゆる文系と理系の生徒の割合：同程度

【多様な学びの確保関係】

- ・学びの状況に関する生徒の肯定的な評価の向上
- ・高校卒業段階の進路未決定者の割合の半減

※ 文部科学省「高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けた「N-E.X.T（ネクスト）ハイスクール構想」～（令和8年2月13日公表）（概要）」より抜粋

關係資料集

令和6年度 地域の県立高校に関するアンケート調査の結果 ①

調査期間

■ 令和6年9月から10月まで

調査
主体

■ 鈴鹿亀山地域高等学校活性化推進協議会
■ 伊賀地域高等学校活性化推進協議会
■ 松阪地域高等学校活性化推進協議会

調査
対象

■ 地域の公立中学校2年生の生徒
■ 地域の公立中学校2年生の保護者
■ 地域の公立小学校5年生の保護者

1 高校を選ぶときに重視する点（主なもの）

選択肢（6つ以内を選択）

- ① 学びたい学科やコースがある
- ② 確かな学力を身につける授業の充実
- ③ 専門的な知識や技能、資格が習得できる
- ④ 興味関心に応じて多様な学びが選択できる
- ⑤ 地域と連携した活動が充実している
- ⑥ 文化祭や体育祭など学校行事が充実
- ⑦ 入りたい部活動がある、部活動が活発に行われている
- ⑧ 友だちや先輩、先生などとの多くの出会い
- ⑨ 一人ひとりの状況に応じて、きめ細かな教育が期待できる
- ⑩ 通学のしやすさ・距離
- ⑪ 学校の雰囲気・イメージ
- ⑫ 施設・設備の充実 ⑬ 進学・就職の実績
- ⑭ 自分の適性や能力
- ⑮ 先生や保護者、友だち等の周囲の人の意見
- ⑯ 学費などの経費負担
- ⑰ その他（自由記述）

■ 生徒

⑪ 学校の雰囲気・イメージ

鈴鹿亀山

53.1%

伊賀

48.0%

松阪

49.0%

⑩ 通学のしやすさ・距離

50.5%

49.8%

49.3%

⑥ 文化祭や体育祭など学校行事が充実

47.6%

46.0%

42.4%

① 学びたい学科やコースがある

39.1%

42.7%

39.5%

⑦ 入りたい部活動、部活動が活発

33.9%

35.3%

35.7%

■ 保護者

① 学びたい学科やコースがある

69.6%

71.2%

73.3%

⑩ 通学のしやすさ・距離

69.3%

68.1%

64.4%

④ 興味関心に応じて多様な選択ができる

58.7%

63.3%

59.4%

② 確かな学力を身につける授業の充実

38.9%

42.8%

39.2%

⑪ 学校の雰囲気・イメージ

41.8%

35.6%

38.2%

※ 各地域での回答者に対する割合を合算した数値の上位5項目

令和6年度 地域の県立高校に関するアンケート調査の結果 ②

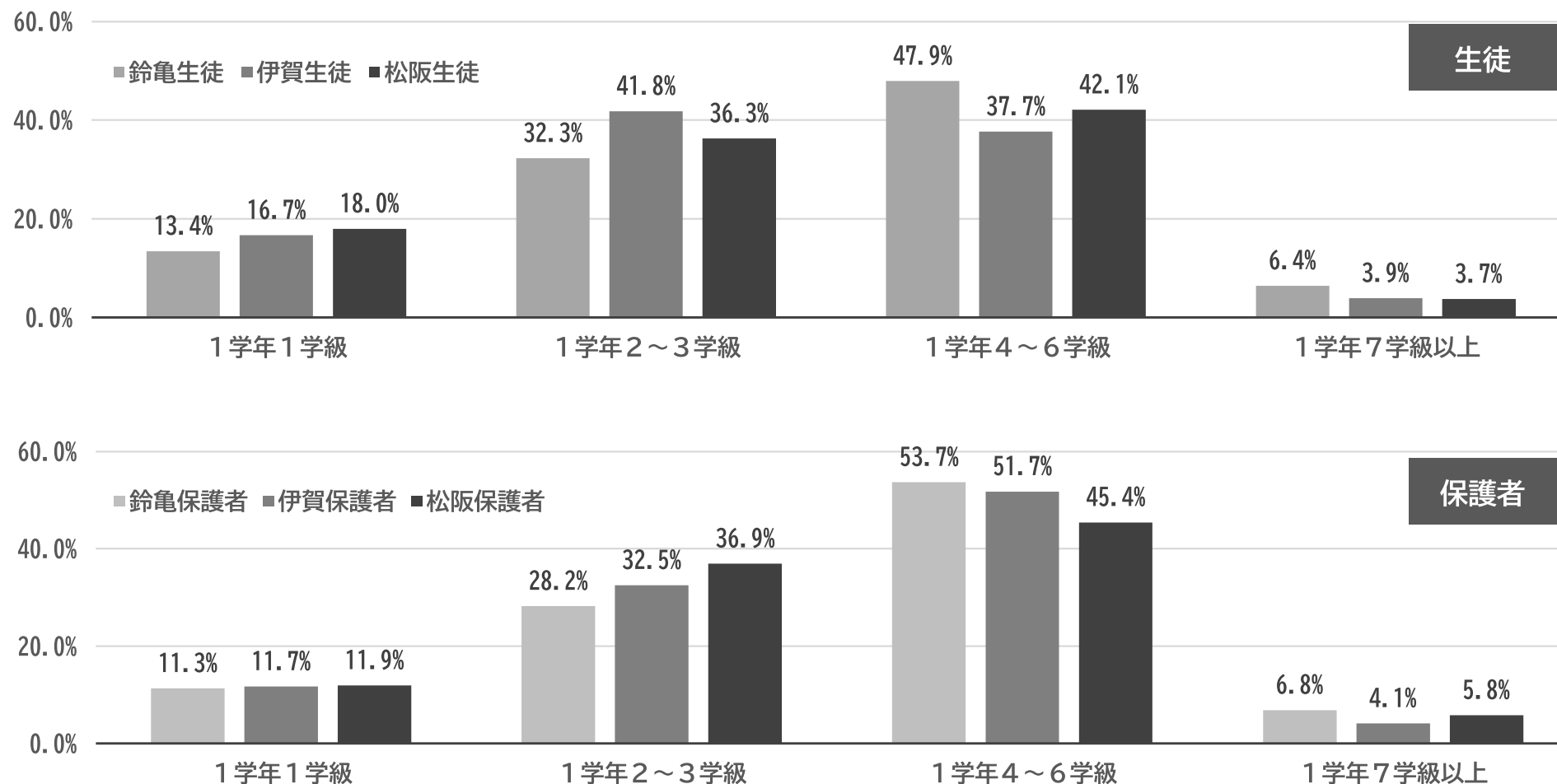
2 高校に期待する教育（主なもの）

選択肢（5つ以内を選択）	■ 生徒	鈴鹿亀山	伊賀	松阪
① 自ら学び続ける力が身につく教育	① 自ら学び続ける力	52.0%	54.0%	52.6%
② 自分で問いや課題を見つけ、主体的に取り組む力が身につく教育	⑦ 基本的な知識	48.0%	46.2%	43.1%
③ 多様な選択肢の中から進路を決定する力が身につく教育	⑪ 社会人として必要なマナーや責任感	46.9%	44.2%	42.0%
④ 地域を題材として学ぶ教育	⑩ 社会性やコミュニケーション能力など	42.0%	43.2%	40.1%
⑤ 大学や企業等と連携・協働して学ぶ教育	② 自ら問いを見つけ主体的に取り組む力	34.1%	32.3%	30.6%
⑥ 人権に対する意識が高まる教育				
⑦ 基本的な知識が身につく教育	■ 保護者	鈴鹿亀山	伊賀	松阪
⑧ ICTを積極的に活用する教育	① 自ら学び続ける力	58.5%	59.5%	61.0%
⑨ 広く世界で活躍できる力が身につく教育	⑩ 社会性やコミュニケーション能力など	58.5%	58.8%	60.7%
⑩ 社会性や協調性、コミュニケーション能力など協働する力が身につく教育	② 自ら問いを見つけ主体的に取り組む力	50.4%	51.8%	53.6%
⑪ 社会人として必要なマナーや礼儀・責任感が身につく教育	③ 多様な選択肢から進路を決定する力	49.6%	52.9%	49.0%
⑫ 特別活動や部活動などを通じて豊かな人間性が身につく教育	⑪ 社会人として必要なマナーや責任感	46.1%	44.1%	47.1%
⑬ 一人ひとりの状況に応じて適切な支援が受けられる教育				
⑭ その他（自由記述）				

※ 各地域での回答者に対する割合を合算した数値の上位5項目

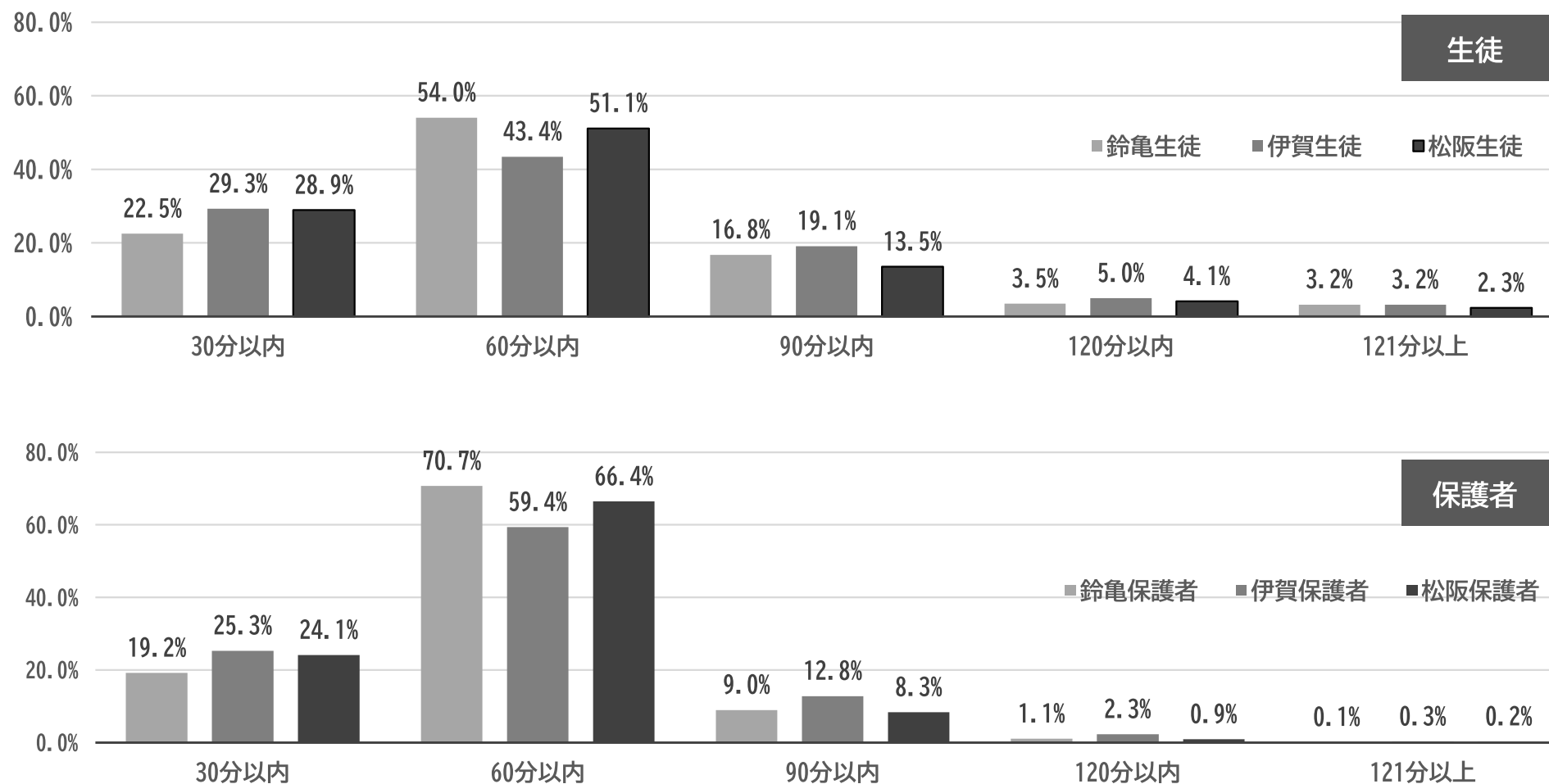
令和6年度 地域の県立高校に関するアンケート調査の結果 ③

3 希望する学校規模



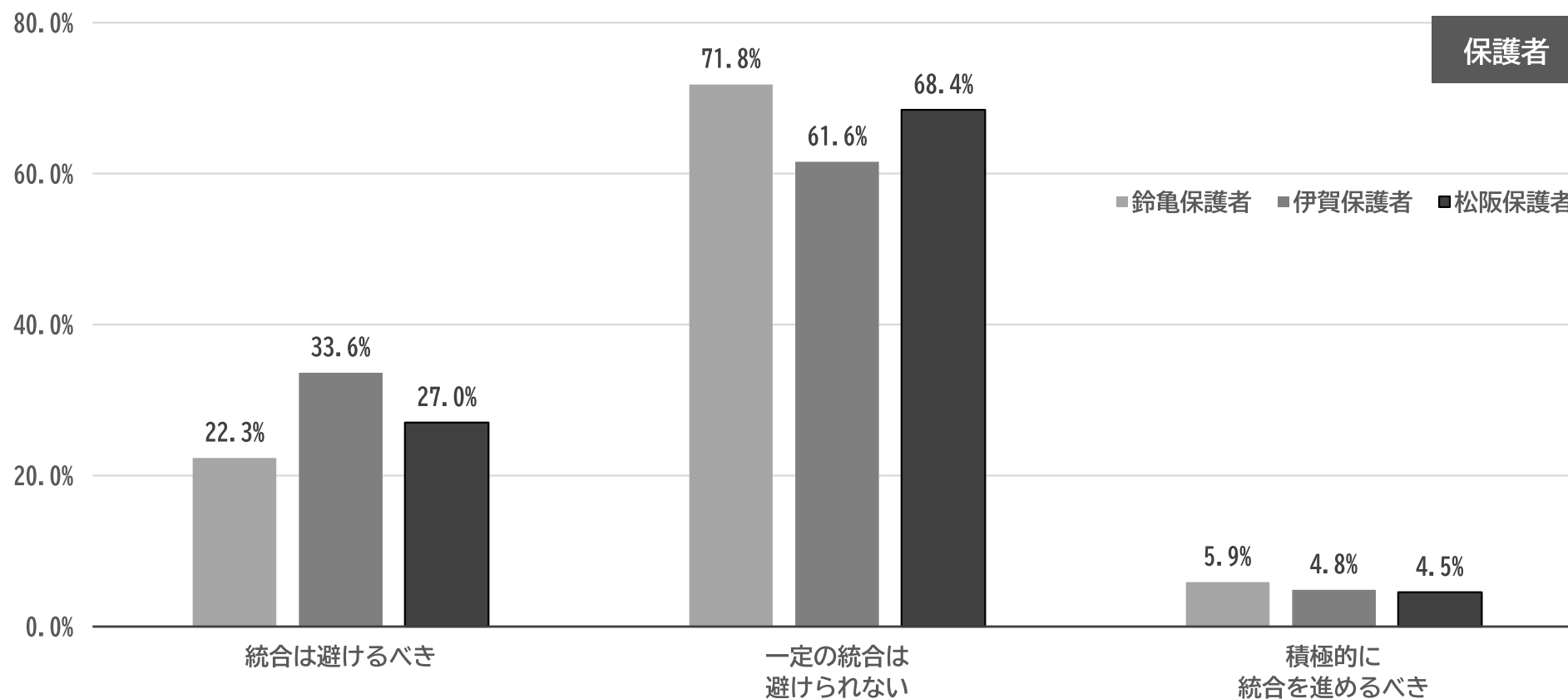
令和6年度 地域の県立高校に関するアンケート調査の結果 ④

4 許容できる通学時間

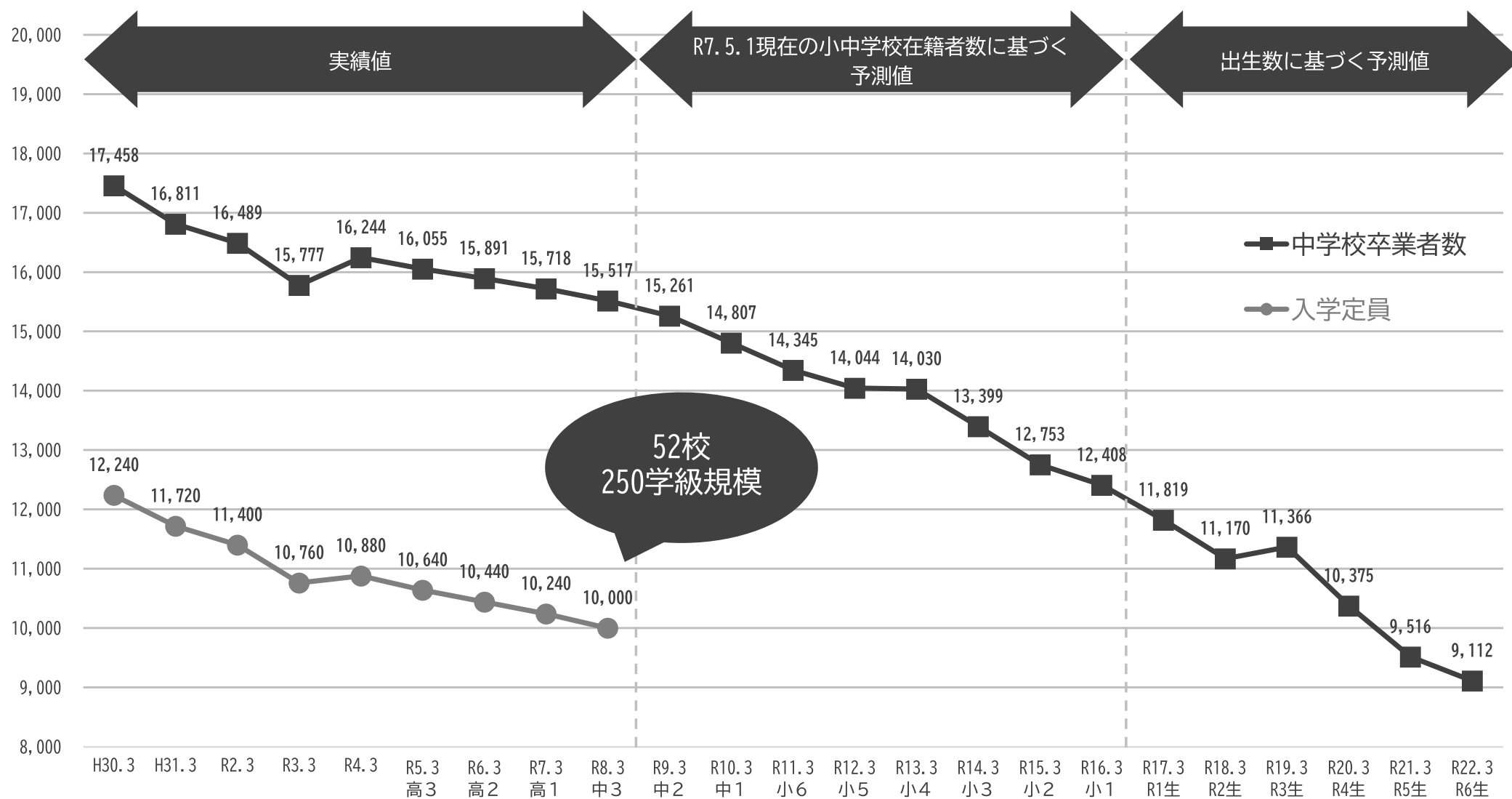


令和6年度 地域の県立高校に関するアンケート調査の結果 ⑤

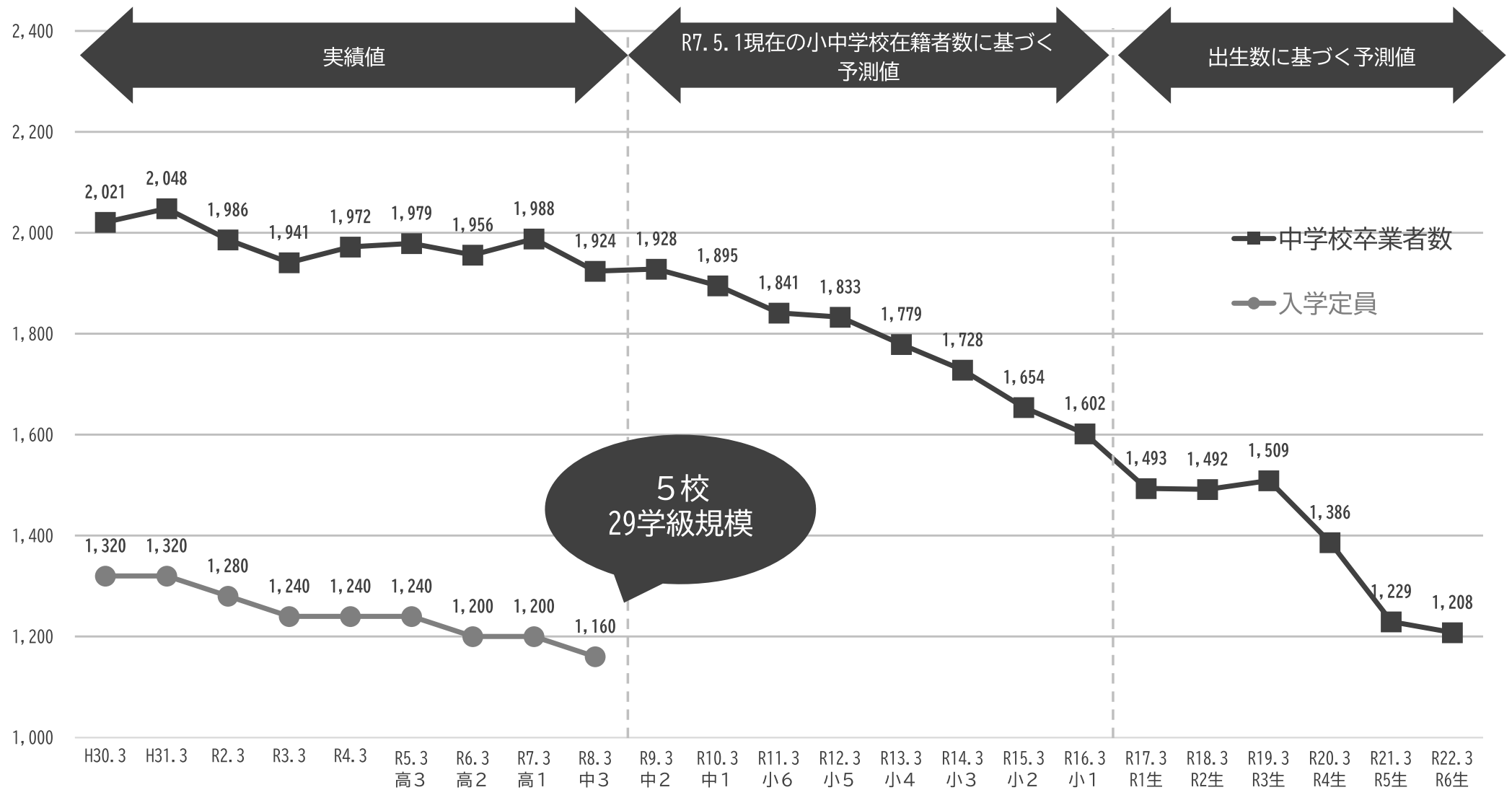
5 今後の地域の県立高校のあり方



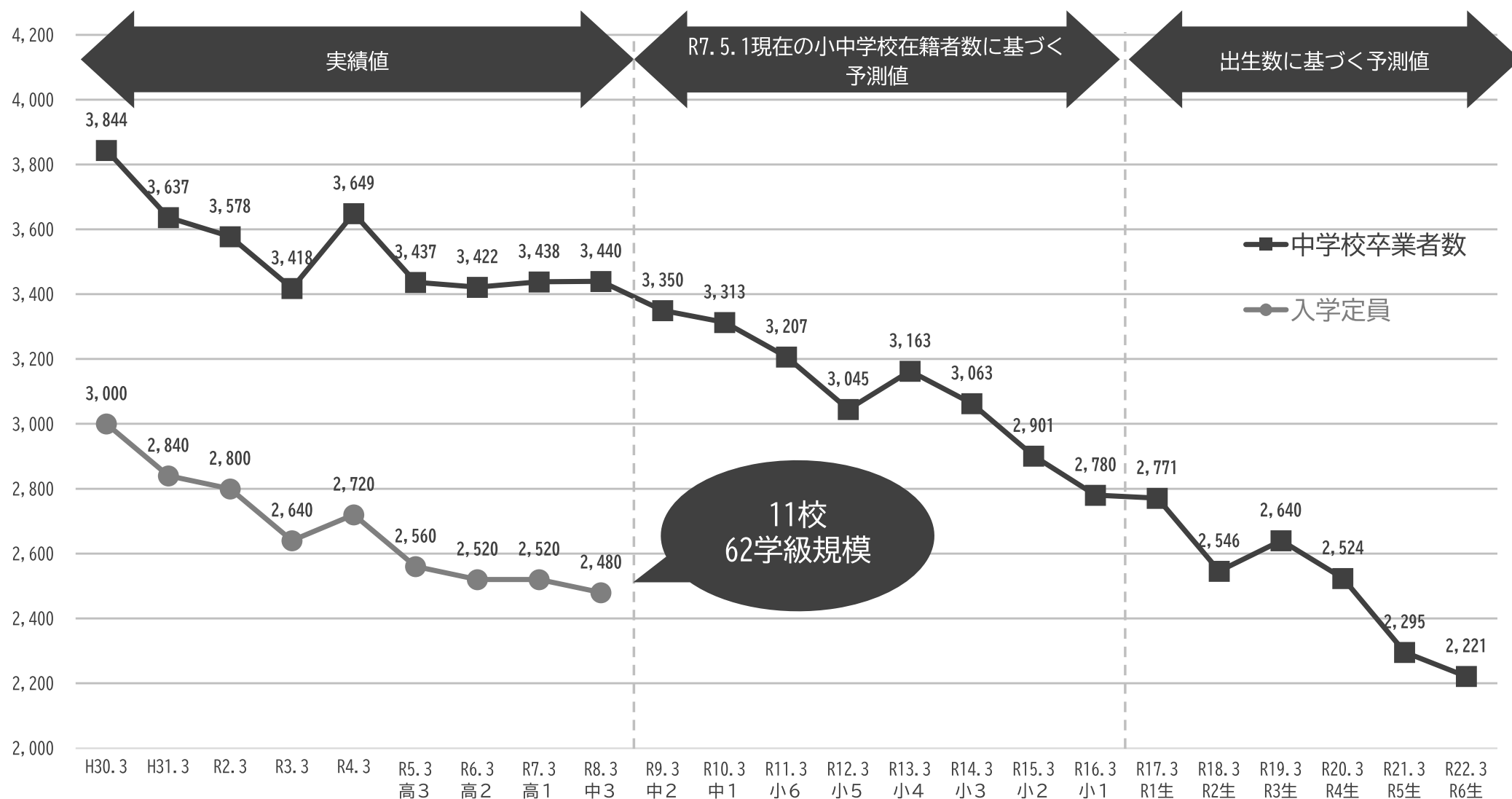
県全体の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



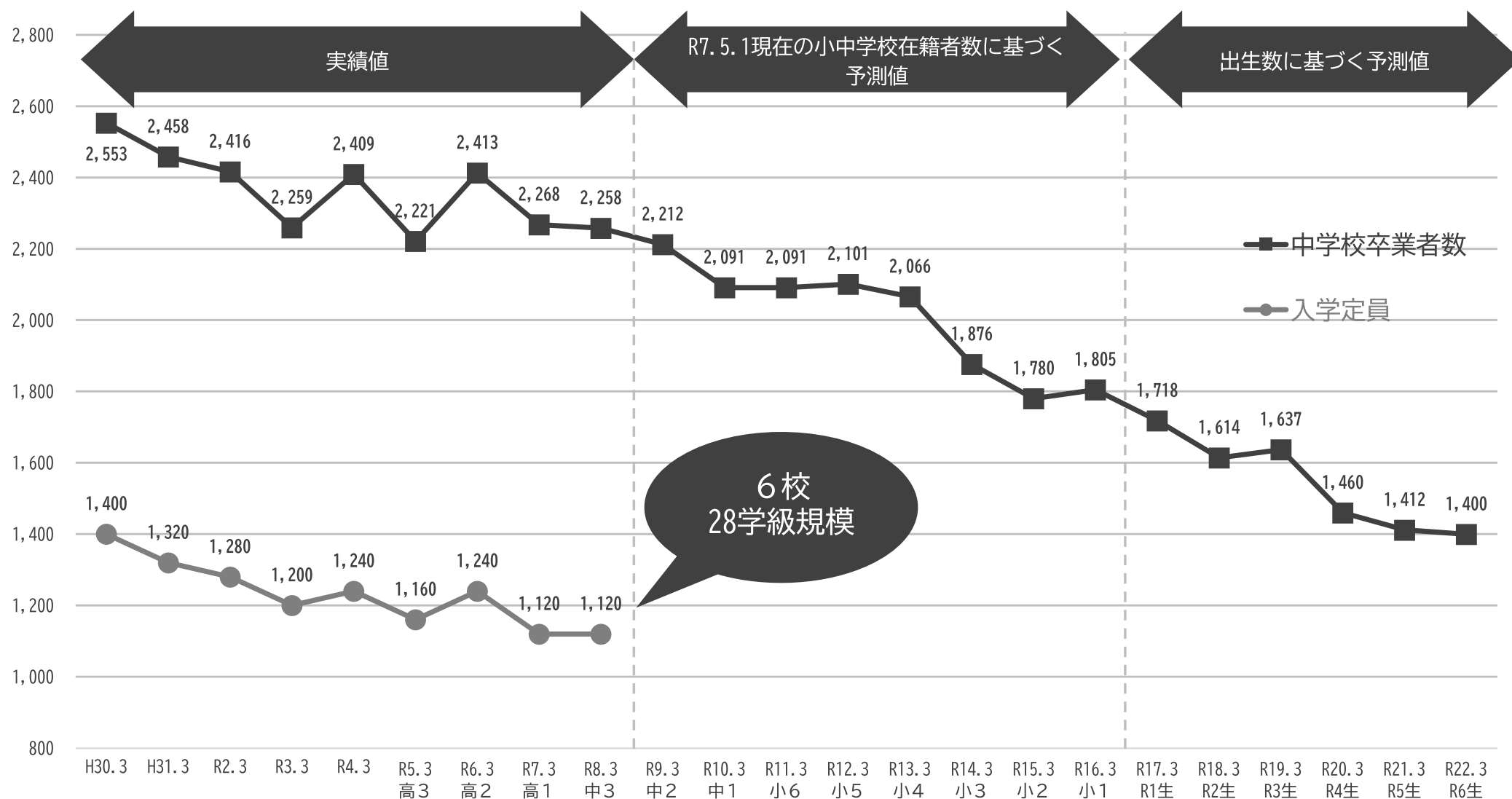
桑名地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



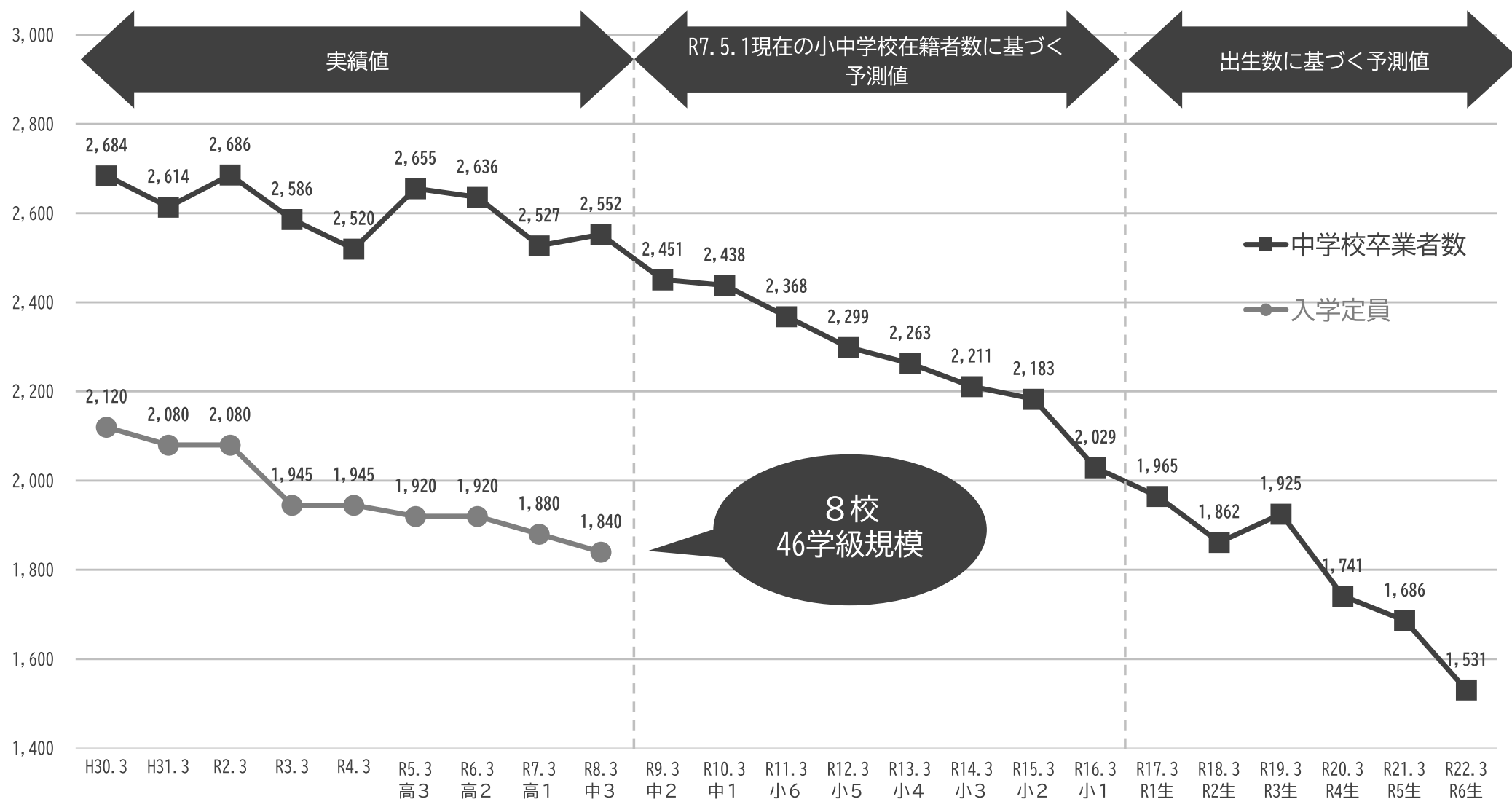
四日市地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



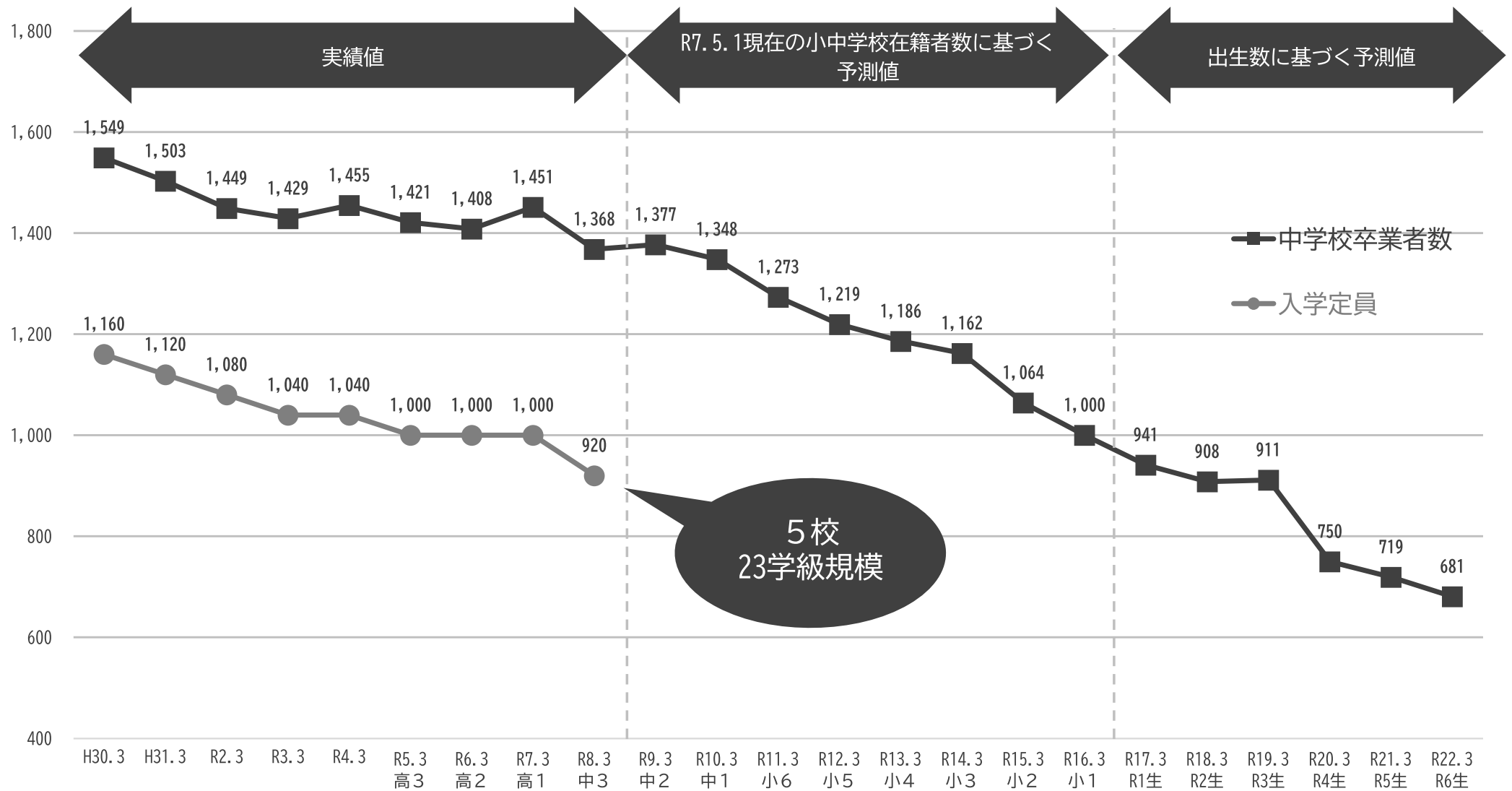
鈴鹿亀山地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



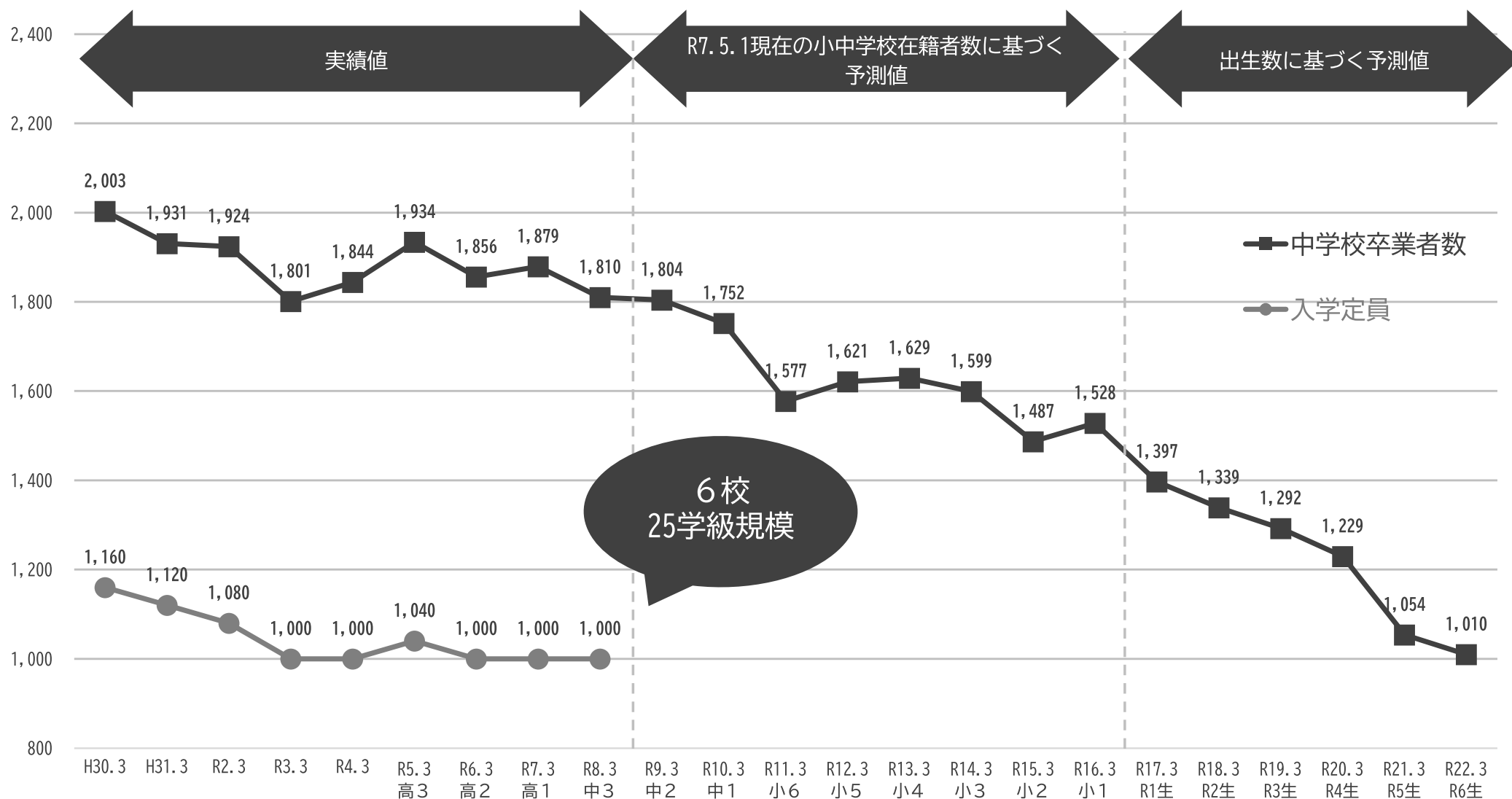
津地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



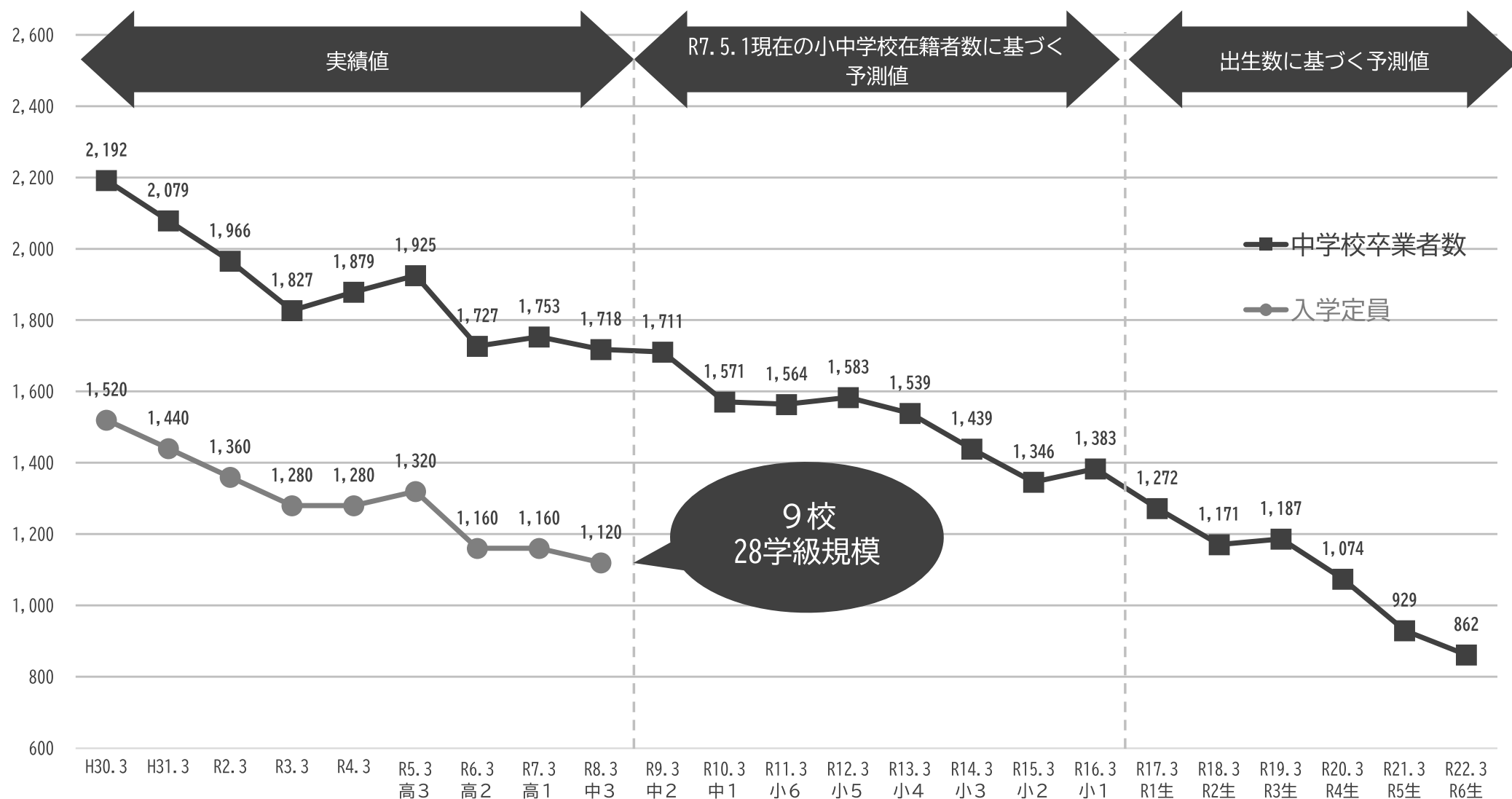
伊賀地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



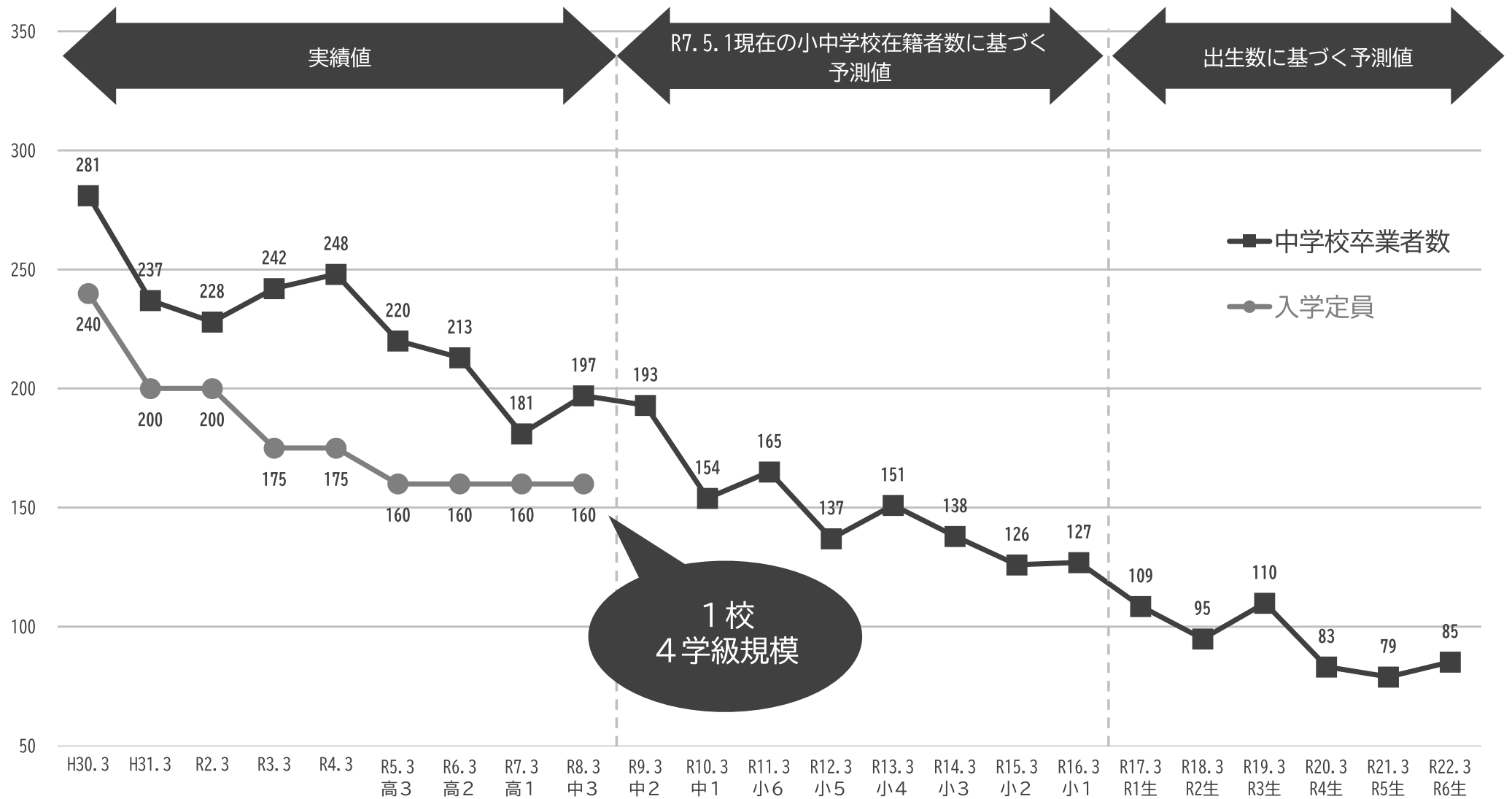
松阪地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



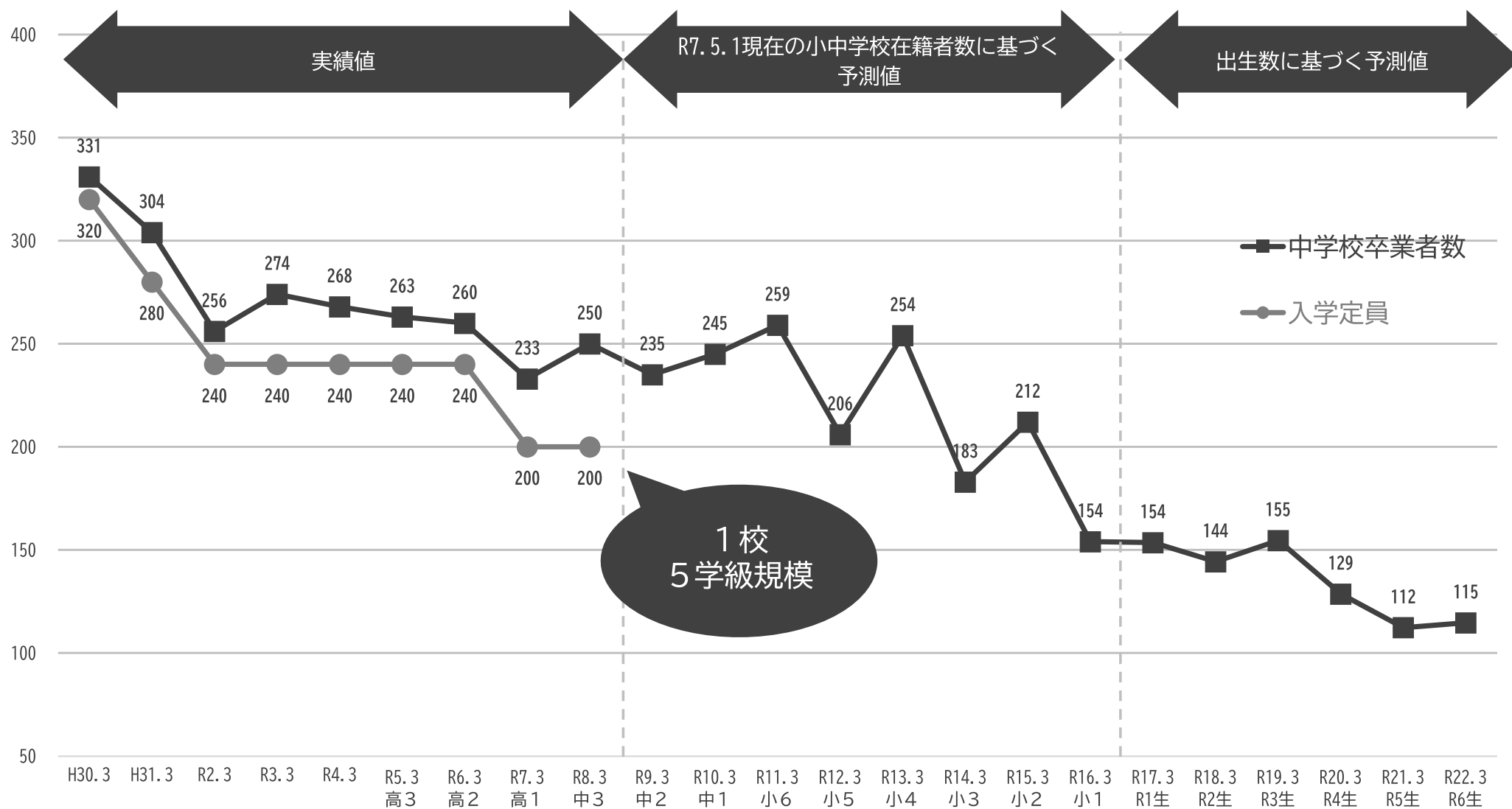
伊勢志摩地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



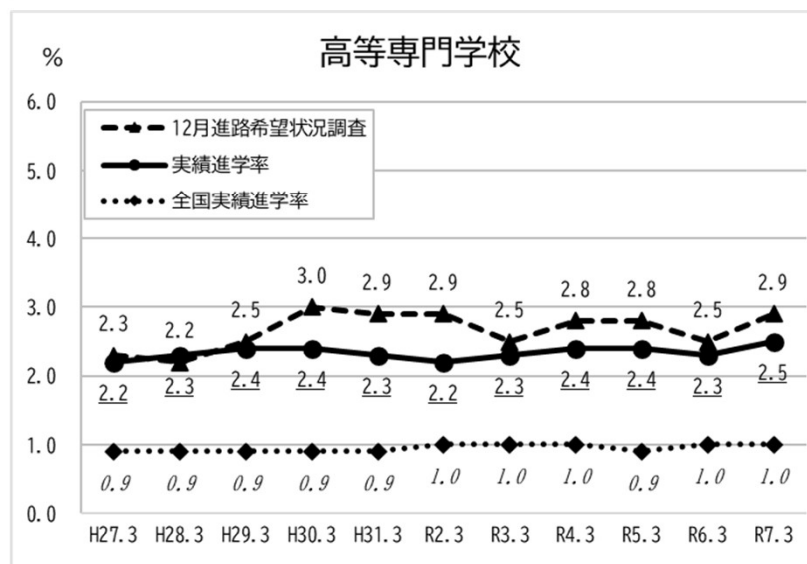
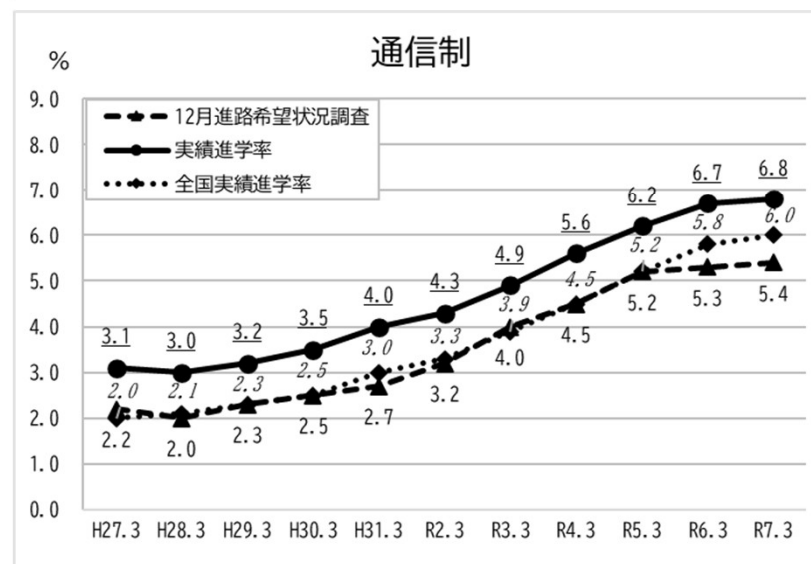
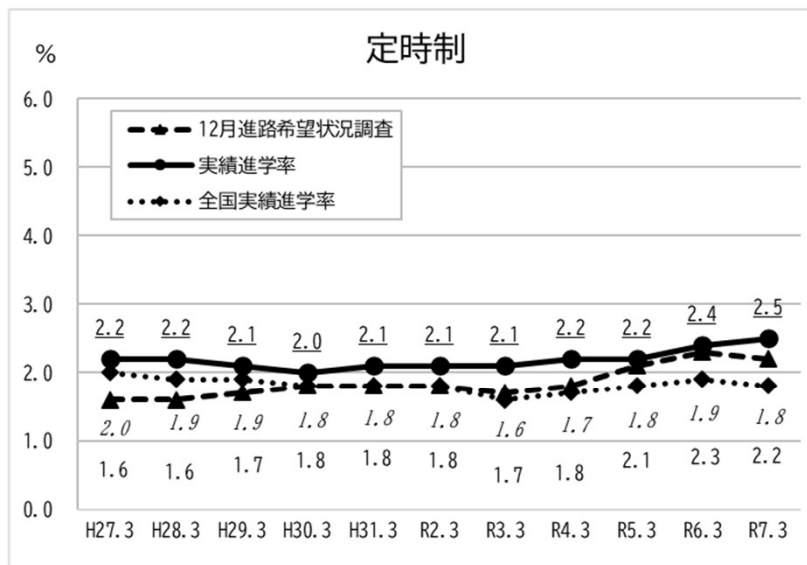
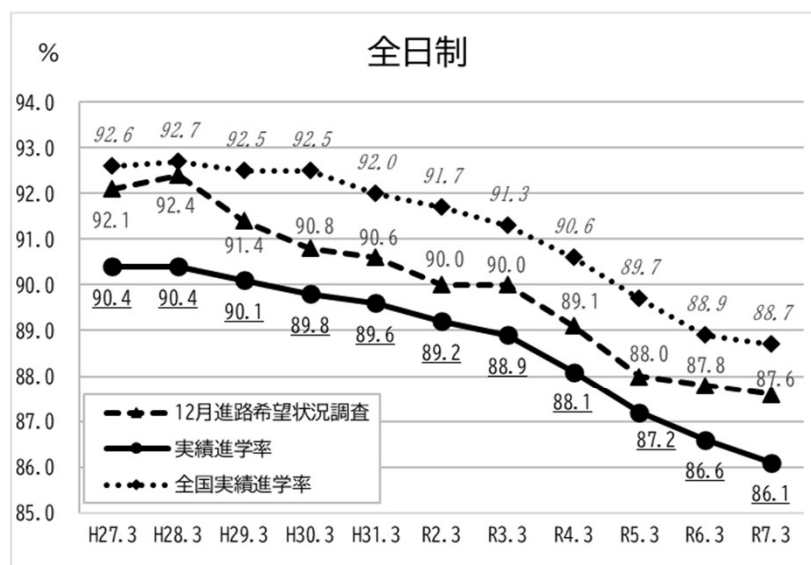
紀北地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



紀南地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員(全日制)の推移



全日制・定時制・通信制高等学校及び高等専門学校への進学率



※横軸は卒業年月、縦軸は進学率 ※進学率は卒業者数に対する進学者数の割合 (%) ～ 12月希望値・実績値(下線)・全国実績値(明朝斜体) ～

県立高等学校(全日制)の学校規模の状況(令和8年度1学年)

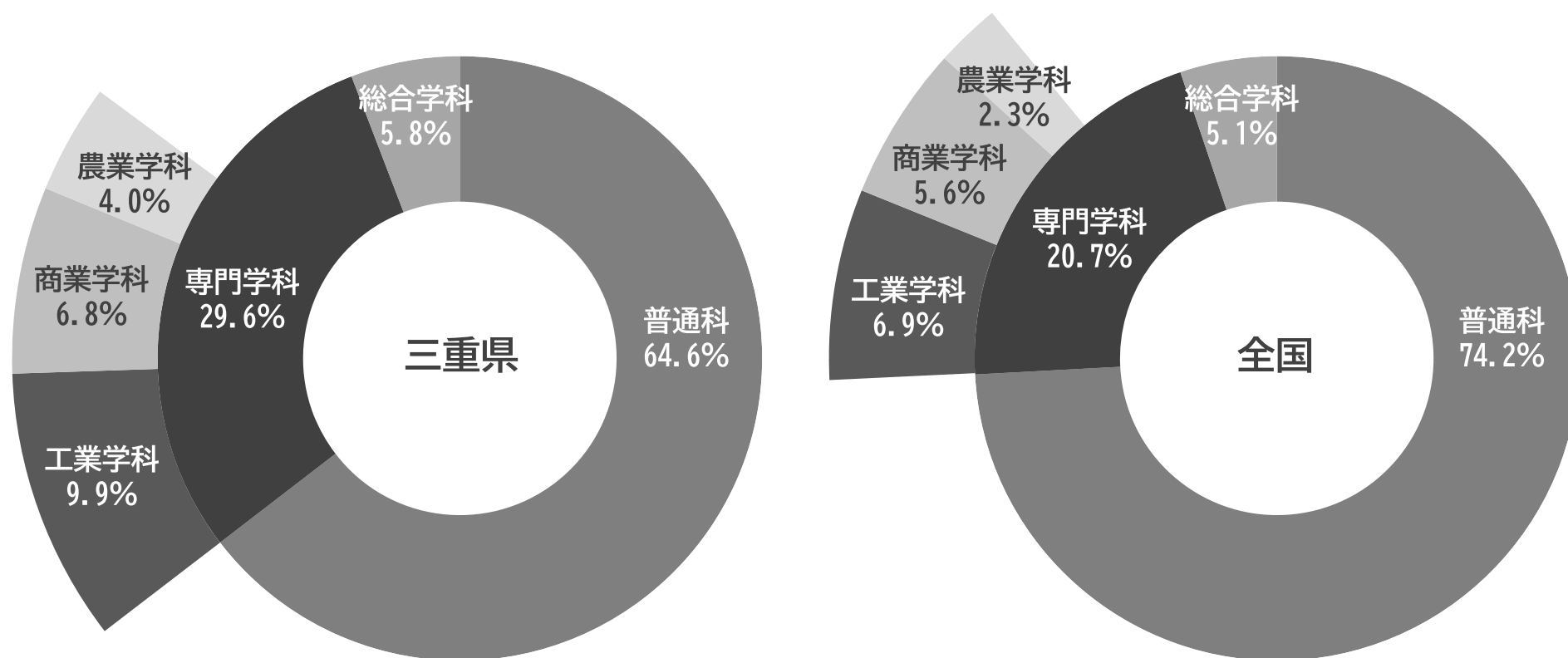
地域	入学定員 (中学校卒業 見込人数)	1学級	2学級	3学級	4学級	5学級	6学級	7学級	8学級	学校数
桑名	県立:1,160 私立: 320 (1,924)				桑名北(普) 桑名工(工)		桑名西(普)	いなべ総合学園(総)	桑名(普看理)	5校 (29学級)
四日市	県立:2,480 私立: 860 (3,440)			朝明(普福)	四日市四郷(普) 菰野(普)	四日市西(普) 四日市中央工(工) 四日市農芸(農家)	四日市商(商)	川越(普他) 四日市工(工)	四日市(普) 四日市南(普)	11校 (62学級)
鈴鹿 亀山	県立:1,120 私立: 470 (2,258)		石薬師(普)		飯野(外他) 稲生(普体)	亀山(普家情)	白子(普家)	神戸(普理)		6校 (28学級)
津	県立:1,840 私立: 685 (2,552)		白山(普商)		久居(普)		津東(普) 津商(商) 津工(工) 久居農林(農家)		津(普) 津西(普他)	8校 (46学級)
伊賀	県立: 920 私立: 155 (1,368)	あけぼの学園(総)				名張(総) 名張青峰(普)	上野(普理) 伊賀白鳳(農工商福)			5校 (23学級)
松阪	県立:1,000 私立: 530 (1,810)		飯南(総) 昂学園(総)		松阪商(商)	松阪工(工) 相可(普農家)		松阪(普理)		6校 (25学級)
伊勢 志摩	県立:1,120 私立: 545 (1,718)	南伊勢(普) 鳥羽(総) 志摩(普)	水産(水)		明野(農家福) 宇治山田(普) 宇治山田商(商) 伊勢工(工)			伊勢(普)		9校 (28学級)
紀北	県立:160 私立: 0 (197)				尾鷲(普工商)					1校 (4学級)
紀南	県立:200 私立: 0 (250)					熊野青藍(普総)				1校 (5学級)
県全体	県立:10,000 私立: 3,565 (15,517)	4校	5校	1校	13校	9校	9校	6校	5校	52校 (250学級)

【備考】

- 学科名略称: (普)普通科(普通科におけるコース制、学際領域学科など普通教育を主とする学科を含む)、専門学科{(農)農業、(工)工業、(商)商業、(水)水産、(家)家庭、(看)看護、(情)情報、(福)福祉、(理)理数、(体)体育、(外)外国語、(他)その他専門学科(国際探究、国際科学、応用デザイン)}、(総)総合学科
- 校舎制の熊野青藍高校は、木本校舎4学級・紀南校舎1学級となっています。
- 1学級40人ベースの学級数を記載していますが、30人・35人学級の実施により伊賀白鳳高校は7学級240人、尾鷲高校は5学級160人として募集しています。
- 私立高校の定員には、青山高校、愛農学園高校を含みません。

全日制高等学校(国公立)学科別生徒の割合

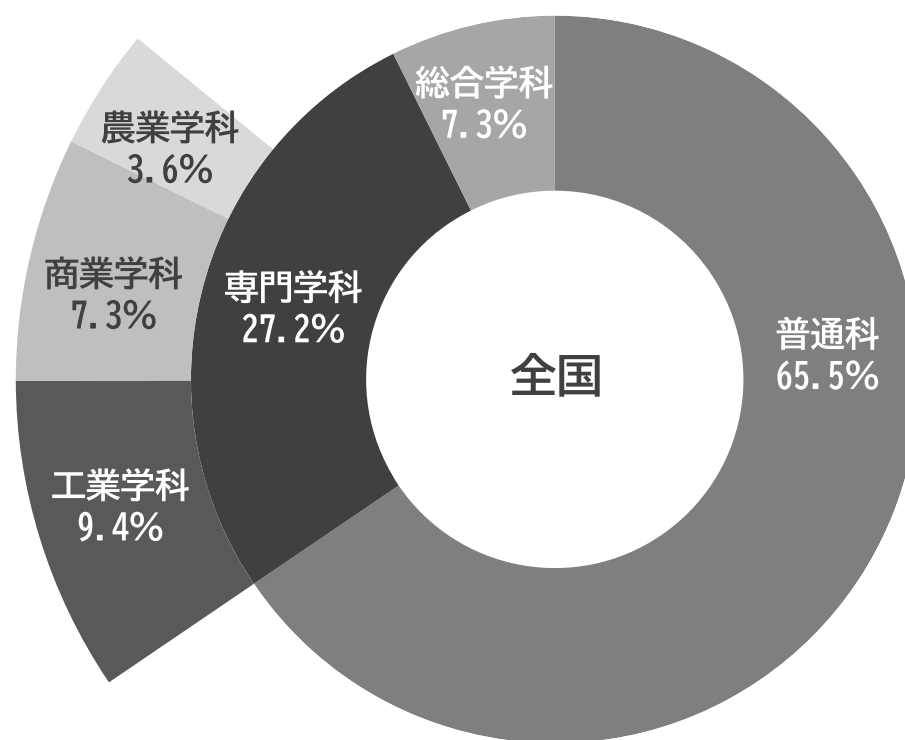
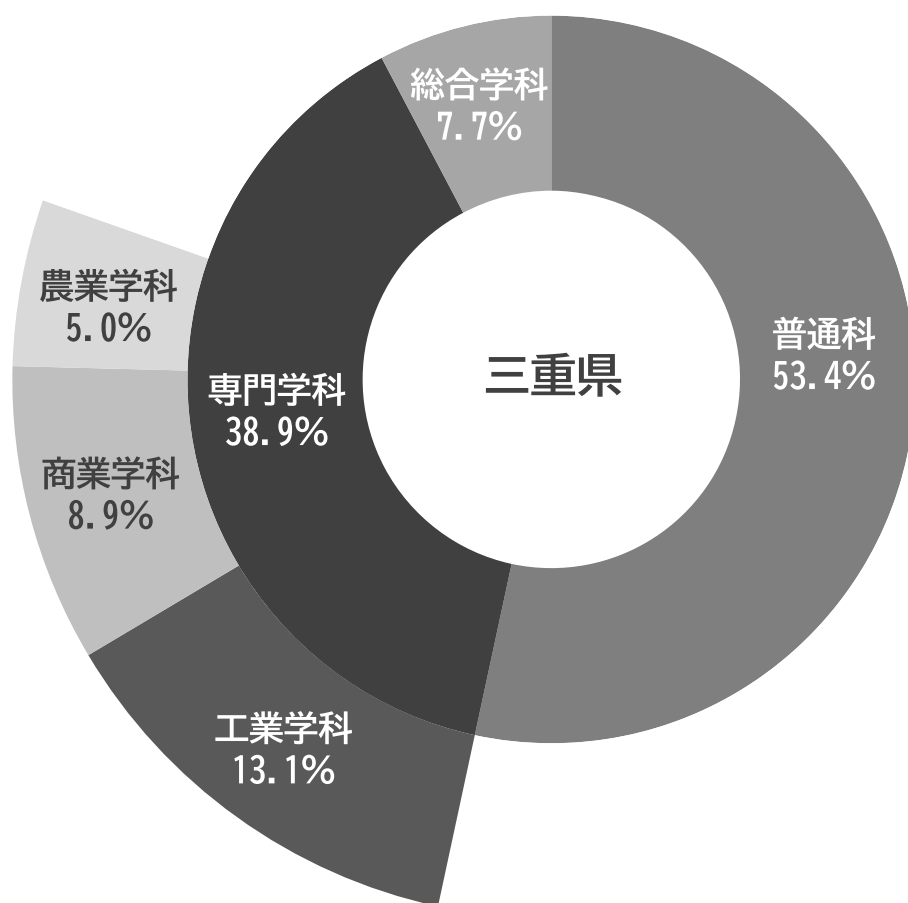
全国と比べて、工業学科を中心に専門学科に在籍している生徒の割合が大きい



※ 学校基本調査（2025年）を基に三重県教育委員会で加工

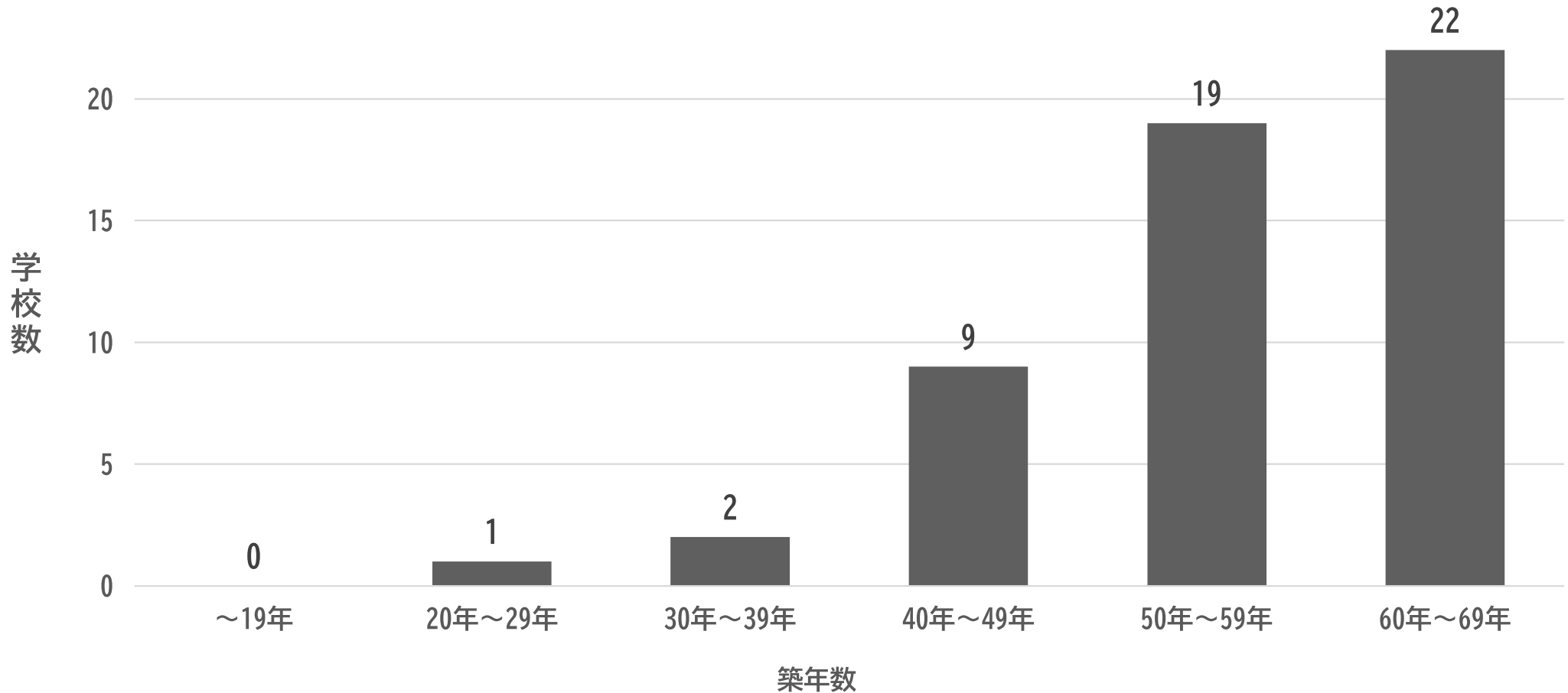
全日制高等学校(公立)学科別生徒の割合

全国と比べて、工業学科を中心に専門学科に在籍している生徒の割合が大きい



※ 学校基本調査（2025年）を基に三重県教育委員会で加工

学校施設の老朽化の状況



【備考】

※1 各県立高等学校（全日制）の主たる校舎の築年数（令和8年3月31日時点）

※2 熊野青藍高等学校については、木本校舎と紀南校舎をそれぞれ1校として計算している。また、木本高等学校と紀南高等学校については、熊野青藍高等学校と同一の校舎であるため、学校数に含めていない。

※3 南伊勢高等学校南勢校舎については、令和8年3月31日をもって閉校したため、学校数に含めていない。